

からんの滝のいわれ

福岡市と佐賀県の境に長く延びているのが、脊振の山なみじゃ。

この脊振山地は、昔から仏教の修行の場じゃったから、たくさんの山伏たちが山の中で修行をしておったそうじゃ。

「からんの滝のいわれ」

昔、脊振で修行をする花乱（からん）という山伏がおった。

花乱は、脊振のふもとの石釜というところにある滝にうたれて修行をしておった。

ところが、これがなかなかの乱暴者じゃった。村の田んぼや畑を荒らしたり、

人を傷つけたり。だから村人は花乱を恐れ、花乱が大きらいじゃった。

ある時、花乱は修行のために三年間だけよそへ行ってしもうた。

「やれやれ、乱暴者がおらんごとなってようになった。」

三年といわず、いっそのことずーっとよそにおってくればよかるとに。」

「そりゃ無理ばい。」

「ばってん、三年間も厳しい修行をしたなら、立派になって、これまでのような悪さをせんようになるかもしれんばい。」

村の人々は、花乱が立派な人になって帰ってくることを心から望んでおったのじゃった。

平和な三年が瞬く間に過ぎて、また花乱が石釜の里へ帰ってきた。

「どけどけ どけい、花乱さまのお通りじゃ。」

三年ぶりに見る花乱は、昔よりもますます意地悪になっておった。

毎日朝から酒を飲んで、村中を暴れまわったそうじゃ。

手のつけられない花乱に困った村人は、どうしたらよいかと話し合った結果、

庄屋さんがひとりの山伏をたずねることにした。

「式部さま、お願いでございます。花乱がいては村人は安心して暮らすことができません。」

「どうぞあなたのお力で、花乱を退治してください。」

式部という人は、花乱の弟子だったが、花乱と違ってとても立派な人じゃった。

「花乱どのは、私の先生だった人です。弟子が先生を退治するのは、人の道にそむきます。」

式部は花乱退治をなかなか承知しなかった。

しかし村の困った様子を聞いて、とうとう花乱を討つことを約束したそうじゃ。

それから、村は大変な嵐に見舞われた。

嵐がおさまった時、村の庄屋さんのところへ式部がやってきた。

「庄屋どの、やっとの思いで花乱を退治してまいりました。」

こうして、村には平和な暮らしが戻ってきたのじゃった。

しかし花乱を退治した式部が石釜に引っ越してくると、式部の家族に次々と不幸なことがおこった。

それで村の人々は「これは花乱のたたりじゃ」と言うて、花乱の霊を慰める神社を建て、

花乱がいつも修行でうたれておった滝を「花乱の滝」と呼ぶようになったと伝えられてお

७.